



第3回 鴻文会総会 1989.11.11 於 山口大学大学会館

鴻文会会報

第9号
発行・鴻文会

753 山口市吉田1677-1
山口大学人文学部内
電話(0839)22-6111
(内線) 808
郵便振替口座
下関0-15902

会長就任の御挨拶

鴻文会会長 大塚博久

(中国哲学・文理第四回卒)

長い、ひとつの時代が終焉し、「改元」によって始まった昨年、国の内外に継起した出来事は、われわれの常識を急速に陳腐化し、時代が新しい転換点にさしかかったことを確実に示しました。この新しい時代の幕明けともいうべき一九九〇年の新春を迎え、会員諸兄姉に御挨拶申し上げます。

さて、わが鴻文会は、御案内の通り昨年十一月十一日、恩師 近沢敬一先生、矢儀万喜多先生、渡辺信生先生を来賓に迎え、発足九年目の節目としての第三回総会を開催致しました。総会に先立つ公開講演は、第一回卒業の重中十朗氏が「テレビ報道三五年」と題して講演(要旨別稿)。五〇年代なかばより、先端的なマス・メディアとして成長し続けるテレビ報道の第一線に在って、時代を画する数々の事件に立ち合ってきた歴史の証言者としての氏のお話は、まことに時宜に適したものでした。氏の「映像は常に真実を伝えるか」という情報の送り手側からの内省にみちた問題提起に、深く考えさせられました。参会者のなかには、氏のかつての同僚、NHK解説委員として著名な松尾龍彦氏(第二回卒)や前鳥取放送局長河野尚孝氏(第三回卒)の顔も見られました。

総会の詳細は、別記の会務報告等に譲りますが、和田会長の挨拶にはじまった議事は、昭和六〇年度(六三年度)の決算、事業報告と、平成元年度予算、事業計画を中心に審議され、会が順調に発展している姿を、具体的に知ることができました。これも偏えに会員諸兄姉の変らぬ御支援の賜と存じます。

わが鴻文会は、昭和五三年の人文学部発足に伴い、旧文理学部文学科卒業生を母体に昭和五五年に結成され、九年目の現在では正会員三、一六八名を擁する組織にまで成長しました。この困難な創成の事業を一身に担われた和田敏英会長、滝本龍也副会長はじめ委員、監事各位の御労苦を謝するとともに、学内幹事として直接会務に携われ、諸事万般を処理して下さい



た岡光一浩、添田建治郎、佐々木衛、各氏の献身的な御尽力に心から感謝申し上げます。

同窓会は、本来、世代を異にしながらも、同じ学舎に学んだという事実と意識を共通の紐帯として成立する人びとの組織であり、「ふるさと」に対して抱く懐旧の情にも似た感情をもって帰属する、いわば情緒的な集団であると考えられます。

しかし、わが会においては、新制大学発足以来わずか四十年の間に、三回の校地移転、学部改組・拡充を経過し、急激な社会環境の変化に伴って、学生自身の生活と意識も多様に変化しているため、懐旧の情といっても依拠するものは一様ではなく、「山口」と「青春」以外には随分と差違がある筈です。しかも同窓会は現実の営為を目的とした他の社会集団などとは異なって、その規範も緩やかで、日常はさほど意識化されることもない稀薄な存在です。かなり意識的な人間と情報の交流を活発化することなしには、組織の維持も発展も期せられません、

鴻文会の今日までの発展は、一に「会報」活動と「会員名簿」の発行に負うところ大でありました。したがって、今後ますますこの面での活動を強化すべきであることは言うまでもありません。しかし、これらの仕事はすべて三人の学内幹事の負担においてなされてきたのが、現状です。今後、研究、教育という本業を犠牲にして過重な負担を強いることには限界があります。

鴻文会は、また、学部と在学生に対して何らかの貢献をなすことを通じて、その発展に寄与することを目的に掲げております。草創期から発展期の段階に達した今日、より有効な事業は何か、今後、壮、中、青各世代がさまざまに英智を集めて、その課題を見出し、実行していかなくてはなりません。研究室単位の同窓組織はかなり整備されておりますから、この有利な条件を生かし、タテからヨコへ、地域支部の確立へと向う組織面での強化も今後の課題です。

この総会において会長という大任を仰せつけられた私と致しましては、これらを思うとき、その重責に身がひきしまるのを覚えます。幸いに第二回卒業の八木充先生が人文学部長として御在職中であり、引継ぎ名誉会長として御指導を賜ることができまし、新しく副会長になられた森田良吉氏は、百二十年の校史と三万余の会員を有する県立山口高等学校同窓会の事務局長として活躍中の、同窓会運営のエキスパートであり、同じく有馬正人氏は、山口県内有数の物流企業の重鎮として、幅広い人脈をもつ実業家であります。また、新、改選の一七名の委員はいずれも優れた人材でありますから、この有力な皆さま方の協力を得て、学内幹事を援助し、与えられた四年間の責務を全うしたいと存じます。今後とも会員諸兄弟の物心両面の御支援を切にお願い申しあげる次第であります。



第三回 鴻文会総会・懇親会開く

新役員決まる!!

第三回鴻文会総会ならびに懇親会は、平成元年十一月十一日(土)、山口大学学生会館にて開催された。

総会に先立ち、午後三時から、文理第一回卒(国史)で元NHK山口放送局副局長の重中十朗氏を講師に約一時間公開講演会が行われた。重中氏は「テレビ報道三十五年―誤報と真実の間で―」と題して、最近社会を揺がした三つの事件を取り上げ、事件の報道には報道する側の誤報がつきまとうことがあると指摘し、その防止策としてのふたつの提案をされた。ジャーナリズムの世界に詳しい氏ならではの、事件の内実にまで掘り下げたわかりやすい説明に、五十人に近い聴衆は時間を忘れて魅了された。その講演要旨はこの会報にも収録してある。

さて四時を少し過ぎて、出席者三十三名にて、総会の議事に入った。文理第六回卒(東洋史)の三好信男委員の開会の挨拶につづいて、議長に、文理第二回卒(英文)の竹内通弘委員を選出し、議事が進行された。

まず文理第一回卒(英文)の和田敏英会長が四年間の行事等をふまえた会長挨拶をした。その挨拶の最後に、和田会長は二期八年間の会長を辞する旨の発言を行ない、出席者一同、氏の会発足当時から会のための多大のご苦労、ご尽力に対して惜しめない拍手を送った。つづいて恒例の学部長挨拶に移り、八木充人文

学部長(文理第二回卒・国史)が学部の実状について報告するとともに、人文学部創立十周年にあたっての、鴻文会の行った記念事業に対して謝意を述べた。

次に会務報告に入り、昭和六十年から四年間の事業報告、会計報告(別稿参照)が岡光一浩幹事(文理第十四卒・独文)より、四年間の会計監査報告が森田良吉監事(文理第四回卒・国史)よりなされ、承認された。引きつづき、役員改選に入り、添田建治郎幹事(文理第十七回卒・国文)から、文理第四回卒(中哲)



の大塚博久会長以下二十四名の新役員(別稿参照)があり、これを満場一致で了承した。それをうけ、大塚博久新会長は会長就任の挨拶を行ない、会運営に対する力強い意欲とともに会員のなお一層の協力を請う旨を力説し、出席者の盛んな拍手を浴びた。最後に添田建治郎幹事が新しく配布した「会員名簿一九八九年版」について若干の説明を加え、すべての議事を終了した。

全員での写真撮影をはさんで、五時すぎより、大学構内の学生食堂で懇親会を行った。文理第二回卒(独文)の伊藤義彦氏のウィットのかいた粋な司会に始まり、文理第四回卒(西洋史)の有馬正人副会長の人生経験豊かな挨拶、文理第二回卒(国

文)の小田稔委員の力強く、かつ愉快な幹杯首頭につづいて、お迎えした恩師近沢敬一、矢儀万喜多、渡辺信生諸先生の有難いお祝辞をいただき、同窓というひとつのつながりによって結び合わされた六十歳に近い者から二十歳を過ぎた若者まで、心をひとつにして聞きあった。グラスがぶつかり、美味に舌を鳴らし、昔を懐かしみ、今を確認し合いながら、秋の夕べを皆、若者のように過した。そして尽きせぬ話、尽きせぬ想いに抱かれながらも、四年後の再会を期して、最後に懇親会にも女性の時代の来たるべきことを期し、文理第二回卒(国文)の福澄子さんの若々しい乙女のような幹杯をもって、午後七時すぎ、一が五つ並ぶ日の第三回の鴻文会総会、懇親会の幕を閉じた。



公開講演

「テレビ報道三十五年―誤報と真実の間―」要旨

重中 十士朗

(国史学・文理第一回卒)

私が本学を卒業した昭和二十八年は、朝鮮特需景気も終って世は不況の時代でした。その上この年は新旧両制度の大学生が一律に卒業した年で、大学は出たけれど……と大変な就職難でした。

その昭和二十八年は日本のテレビ放送が始まった画期的な年でもありました。そのテレビの歩みと歩調と同じくして私達の世代は社会での活動をはじめたのです。

私ははじめ新聞記者になり、活字メディアで基礎を教えこまれ、のちNHKに入社し、映像メディアの人間になりました。一昨年、定年で退職し、マスコミとは無縁の生活をしています。マスコミの世界を去って不思議にマスコミの世界が見渡せるようになりました。欲が無くなったからでしょうか。そんなことから、このような大仰なタイトルになった訳です。さて現代ほど、世間の人がマスコミの動きに関心を示す時代はないように思うんです。ついこの間まで日本列島を吹き荒れたリクルート汚職、天皇崩御・改元、また消費税導入と話題は豊富で、マスコミにとってまさに正念場、カキ入れ時の年でした。だが逆に批判が集中した年でもありません。

その批判の根底には、実は、多くの誤報問題があったのです。マスコミの動きが活発になり、各社が競い合えば、人間の

営みですから誤報がつきまとうのも、一面ではやむを得ないことかも知れません。しかし各社が犯した誤報がマスコミ不信に大きく作用しているのは事実です。その誤報も、「御免なさい」で済む誤報と、済まない誤報があるのです。

去る十月、朝日新聞が新聞週間にちなんで実施した世論調査によりますと▼新聞報道が正確と答えた人は58%で前年調査より10%下降▼新聞が公平と答えた人



は47%でこれまた7%下降。ほんの一例ですが、ジャーナリストにとって由々しい問題です。この不信の陰には朝日新聞のいわゆる『サンゴ事件』が潜んでいるといっても過言ではありません。

『サンゴ事件』と言うのは、四月二十日の朝日紙面で大サンゴの群生した岩にKYと刻んだカラー写真をのせ、自然保護の大切さを訴えた企画記事です。全体として素晴らしい企画で、写真もコメントも立派なものです。処がこの写真が、実はカメラマンがストロボの柄でKYと刻み、写真に撮って掲載した、つまり自作自演であったことがのちに判明し大問題になったのです。

朝日新聞は十月になって社長以下関係者の辞職、退社等の処分を行い、あわせて経緯を紙面で公表し、政治家に先駆けケジメをつけました。私は朝日のケジメを、ササガ朝日だと評価します。しかし評論家の立花隆さんは、一九八〇年のワシントン・ポスト紙のジャネット・クック記者の誤報事件を引用して処置が手ぬるいと厳しく批判しています。私はこの記事は、誤報というよりも虚報だと思えます。昭和二十五年に同じ朝日が犯した伊藤律会見記と同じ性質のもので、報道界全体に大きな汚点を残しました。ネット記事は再びあってはならないことで、読者(国民)の報道への信頼を大きく傷つけました。後世に残る大誤報の一つでしょう。

次に誤報ではありませんが、テレビの勇み足ともいえるべき、「潜水艦などおと釣船衝突事件」をとりあげましょう。事件はご承知のように昨年七月二十三

日発生し、三十人の方が亡くなられました。

昨年の秋、私は江田島の旧海軍兵学校を訪れました。この時、海上自衛隊の一等海佐から「NHKの放送で、海上自衛隊が一夜にして悪者になった」と抗議を受けました。

というのは……事件発生後の二十五日、釣船の接客係の十九才の女性が記者会見をして「助けて」と叫んだのに、潜水艦の乗組員は助けてくれなかった。何人もの人が助けを求めながら海の中に沈んだ」と重大な発言をしました。

一佐の抗議はこの談話の扱い方です。つまりNHKは事件当日、いち早く飛行機を飛ばして、空から漂泊している海上の潜水艦を撮影しました。艦上では救助活動を終えて、検証まじの隊員が立っているエア・ショットがありました。この映像をコメント・バックに19才の女性の談話が流れたのです。一佐の抗議はこのワンカットにあるのです。映像の扱いが適切を欠くというのです。視聴者はこの画面が、女性が泳ぎながら助けを求めていた時の画だと思ひ、隊員は腕組みをして女性を黙殺したと勘ちがいましたと言っています。この女性の記者会見は全マスコミが取り上げ、「自衛隊が悪い」という世論の流れが一夜にして出来上ったというのです。この談話ののちに海上保安庁長官が真実ではなかったと否定していますが、……。

さてこの場合、私はNHKが意図的に編集したとは思いません、ましてや誤報でもありません。しかし画面とコメントの合成が視聴者に強烈な印象を与えたの

は事実です。世論の形成に強大な力を持つマスコミ、特にテレビ報道には細心の配慮(編集)が必要だということを教えています。この場合テレビの勇み足ということで、テレビのあり方に一石を投じたケースです。

次に第三のケースとして宮崎事件のホラービデオの件を取りあげましょう。詳細はさけますが、宮崎は幼女連続誘拐殺人事件の容疑者です。

宮崎の家宅捜索のテレビを見て驚いたのですが、狭い自室の周囲はビデオテープの山でした。その数は約六千本と言われていますが、この中に多数のホラービデオが発見され、ホラービデオの影響で宮崎は猟奇的な行動に走ったのではとする論調がマスコミにとりあげられました。私もそのように信じていました。

宮崎事件を契機に各県の関係機関やPTAのお母さん達、はては青少年育成国民協議がホラービデオの規制に乗り出しました。そして県議会議員が規制問題を執行部に質問するという場面も見られました。

お母さん達が走り回った成果でしょうか、これまでに全国で七十六本のビデオテープが各府県の有害図書に指定されたということです。

処が十月二十四日の毎日新聞で立教大学の高島教授が書かれた記事を読んで愕然としました。それは「あれほど取りざたされた宮崎容疑者とホラービデオの関係は捜査本部の推測談話からマスコミが作りあげたお話だ」というのです。

虚構の上にお母さん達が走り回り、有識者が世間に向かってお説教をしたとな

ると、これは喜劇でしょうか。私は喜劇よりも怖い問題として考えなければならぬと思つておられます。というのは、例え私の嫌いなホラービデオとは言え、マスコミにとって一番大切な表現の自由、報道出版の自由の下に作られたビデオです。それにマスコミ倫理懇談会では今回の規制の陰に取締機関の動きが見え隠れしたという説もあります。宮崎とホラービデオの関係は今後公判で明らかになります。が、ともかくにもこのケースはマスコミが世論をミスリードした最も悪いケースと思われれます。報道関係者はもっと慎



重に行動することを望みます。

さてこれまで三つのケースを紹介しましたが「大きい誤報。小さい訂正」と皮肉られるほどマスコミ界は訂正を嫌う体質があります。その気持ちはわかりますが、この体質を変えないとマスコミ界は

成熟しないのです。市民の信頼も得られないのです。ではどうしたらいいのか? ささいな提言です。

まず記者サイドから申します。記者の足腰を鍛え直すことです。当局側の発表に対して、その裏付けをとる努力をすることです。また談話取材も政府高官筋と違った表現ではなく、職名、氏名を明らかにすることです。そして何よりも客観

報道の隠れミノから脱け出て、署名記事を多くすることです。

一方読者(視聴者)サイドに立って言えば、誤報記事で泣かされた人の言い分を機関として取りあげ、正しく処置する機構(オンブズマン制度)を報道界全体で組織することです。それが誤報のない報道を再構築し、国民の信頼をとりもどす第一歩と確信します。

山口大学人文学部

公開講演・開放講義開かれる

平成元年度人文学部では、「開かれた大衆学を目指して、ともに学習する喜び」というメイン・テーマのもとに、公開講演を二回、山口市と下関市において、開放講義を学部内において六回開催した。これらは「生涯教育・生涯学習という時代の要請にこたえて、山口大学人文学部の研究・教育の成果や各種の学術情報を一般市民に公開し、大学と地域との結びつきを深めながら、今後の地方の大学のありべき発展方向を探求する」という趣旨で、昭和六十三年度に人文学創立十周年を迎えたのを機に、学部内の教官によって行われたものであって、次年度以降も県内各地において開かれる予定である。なお、今年度のテーマと講師等は次のようである。

・第一回公開講演 六月十七日(出) 山口市

テーマ 女性と家族

「近代日本の女性」山田 洸教授

「現代家族考」問題点とその展望」木下 謙治教授

・第二回公開講演

十一月十一日(出) 下関市

テーマ 「外から見た日本社会」

鈴木 満男教授

・第一回開放講義(六回シリーズ) 人文学部

十月十四日より十一月十八日まで

の毎週土曜日

テーマ 「日本文学の詩心をたどる」

世阿弥・芭蕉・藤村」

柴田 勝二講師

石井 大教授

水本精一郎教授

会員名簿は無料です。終身会費(五、〇〇〇円)未納の方は至急お納め下さい。

鴻文会 二期八年の歩み

鴻文会前会長 和田敏英 (英米文学・文理第一回卒)

思い起こすと、もうかれこれ十年昔の話になる。『山口大学三十年史』(昭和五十七年十二月刊)の編集や執筆に携わっていた頃、文学部とその前身母体たる旧制山口高等学校との同窓会合併問題が改めて気に懸かり始めていた。そのうえ、昭和五十三年六月には文学部が改組されて人文学部と理学部に分かれた。してみると、旧制山高と文学部そして人文学部の各卒業生の同窓会は一体どのような関係を持つべきか、おのずから脳裏を掠める機会が多くなっていたわけである。当時、文学部同窓会はほとんど冬眠状態、旧制山高同窓会との合併も進捗せず、結局、文学部の改組に則して、昭和五十六年十月、文学部同窓会を発展的に解消し、文学部文学科と人文学部とを一本化する同窓会「鴻文会」が結成される運びとなった。たまたま旧制山高、文学部文学科、人文学部の三者それぞれに縁をつなぐ者として、さして同窓会向きでもない人間が結成の任に当たったのである。「鴻文会」の愛称は「山口市の由緒ある鴻の峯にちなみ、大鳥のごとく将来雄飛する期待をこめ、さらに旧制山高同窓会「鴻南会」の一字をも継承することになります」と、「鴻文会会報」創刊号(昭和五十六年十二月)に記した通りである。

わが鴻文会はこうして誕生した。昭和六十年十一月、第二回の総会時には丁度アイルランドのダブリンに滞在中、遠く



異郷の空から盛会を祈ったものだ。さらにオリンピックと同じ間隔、四年後の昨秋、平成元年十一月十一日、奇しくも一字が五ヶ連なる日に第三回の鴻文会総会も無事終えることができた。ともかくも、鴻文会発足以来八年が過ぎた。しかし、この間、鴻文会は何をして来たか、ということになると内心忸怩たるものがある。せめて、年一回発行の「鴻文会会報」はこのたび第九号を数え、四年目ごとの「会員名簿」も第三版に達したのは

文理第十七回卒同期会

青春の地山口へ!

卒業してから20年!

この言葉を合言葉に、昭和四十四年文学部文学科卒業の十八名が、十一月十一日山口市熊野町の「防長苑」に集いました。昭和四十四年文学部文学科卒業の同窓会も、回を重ねて今回が第三回目となりました。第一回は一九八〇年に、第二回は一九八五年に開催し、次回は五年後の一九九〇年となっておりますが、今年が卒業二十年の節目の年に当たると、来年の予定を繰り上げて開催しました。

出席者は男性十三名、女性五名、北は小金井市から南は日南市と全国から集まりました。同窓会は、予定の午後六時を少々過ぎて始まりまして。二十年の歳月は正直で

同期会・研究室同窓会だより

役員はじめ会員諸兄弟のご協力あってのことではあるが、とりわけ学内幹事の三氏(独文第14回卒の岡光一浩教授、国文第17回卒の添田建治郎助教授、社会学第19回卒の佐々木衛助教授)の献身的なご尽力によるところが大きい。ここに深甚なる謝意を表しておきたい。

去る第三回の総会において、大塚博久新会長はじめ生まれ変わった役員体制のもとに鴻文会は三期目に入った。皆さんの今後のご発展をお祈りするとともに、旧に倍するご支援を切望する次第である。



なくぎこちない会話でスタートしました
が、自己紹介が終り、時間も経過してい
くと、初めのぎこちなさはどこへやら、
うちとけ、話も段々と佳境に入ってい
きました。

話題も仕事、家庭、趣味と輪が広が
ていきましたが、やはり子供の教育に
ついては論議が白熱していきまし
た。酒、ビールとメートルが上るにつれ、
話す声もヴォルテージも上り、学生時代
のコンパの席かと錯覚に陥る程でした。

八時半過ぎ、次回担当の国文学の添田
君の首頭で乾杯し、一次会に区切りを
つけましたが、これだけ勢いがつくと、も
う止まりません。十八名全員で、二次会
へと湯田の街に繰り出しました。

青春の地山口が、熱く熱く燃えた一夜
でしたが、次回同窓会での再会を約し
て、全国へ散りました。

(弘中 稔悟 社会学・文理第十七回卒)

社会学同窓会

第十二回総会が平成元年六月三日、湯
田山泉荘にて行われました。参加者は二
十四名でしたが、昭和二十八年卒から平
成元年卒までの幅広い層が集い大変たの
しいひとときとなりました。総会に続い
て三十七年卒の後藤文利氏(福岡市在住、
TNC勤務)に講演をお願いいたしまし
た。後藤氏には、テレビ制作に携わる立
場から、取材における苦勞話や現在のジャー
ナリズムのあり方など多岐にわたっての
興味深いお話をいただきました。

先生方は、社会学、社会心理学の現ス
タッフはもちろんのこと、近沢先生にも
お越しいただきました。近沢先生は壮大

な構想のもとこれから新たなお仕事を考
えておいでの事で、一同感銘受けると
ともに自らを省りみて身の引き締まる思
いが致しました。

現在、わが同窓会は福岡、広島、東京、
大阪の全国五支部を持つに至り、それぞ
れの地区において、活発に交流がなされ
ているようです。「山口までは遠くて」
とお考えの同窓生のみなさん、ぜひ支部
の会合に顔をだしてみてください。

(加来 和典 人文学部助手)

独文同窓会雑感

今回の「独文同窓会」は、前回と同様
「鴻文会」終了後、処を替えて行われたが、
この相談を受けたのは、大学の岡光先生
からで、「やった方がいよ、やろうよ。
」と勝手な返事をしたのが、二ヶ月位前
のことでしたかね。

途中で、「参加希望が十名そこそこで
困りました」と、例のドスのきいた「オ
カ・ミ・ツです」の連絡にも「集まれ
る者だけでいよ、人数は気にすること
ないよ。」と相も変らず無責任な返事をし
た次第。

岡光先生は、TEL連絡・個人勧誘等、
鴻文会の世話の合間を縫って、大へんな
ご苦勞をされたものとお察しする。

そもそも「同窓会」なるもの、どこで
も世話役は大へんで、また、そういう苦
勞を引受ける中心人物があればこそ、成
功するものだ。

私も、この歳になれば、(何しろ、第一
回入学、第二回卒業ですからね)いろい
ろな種類の同窓会があるので、常々、
「世話役」は本当にご苦勞様だなあ、と思っ

ていました。どんな種類の同窓会にして
も、大抵は、

- ①まず、机を並べた同級生
- ②同じスポーツや、文化活動をやった
グループ
- ③同じ職場にいて、苦勞を共にしたメ
ンバー

等がほとんどで、大方、「やあ、元気が
ね」、「お久しぶり」、「あれは誰だっ
たっけなあ？」等々。その主流は、「昔」
を懐古することに終止して、済んでしま
えば、「あ、懐かしかった。」とか、「彼
は、すっかりカンロクがついたなあ」と
か、「可愛いかったのが、スッカリ、フケ
込んだなあ」とか、常に懐古に向かうも
のだけれど、先日の我が「独文同窓会」
は、可成り様子が違っていた。退官記念
の渡辺先生と、長老の矢儀先生のご出席
はヒットだったが、主なメンバーは、来



年還暦を迎える私から、卒業直後の新進
の方まで、約四十歳の開きがあり、
その雰囲気は、落ち着いた中にも、若さ
と活気に満ちみちていたように思われた。
ほとんどの人が初対面であったにも拘
らず、何かしら、気兼ねのない「同志」
「同胞」の親しみと安心感を抱いたのは、
私一人ではなかったらうと思う。

「ドイツ語」そのものが、現職や、現実
社会に直接役立っている方は、非常に少
ないと思うが、そのことが返って「僕に
はコレがある」。かって、あったー、
「私は、ドイツ語を専攻した」という、い
さ、かのプライドと自負心。現社会の
「自分」だけが、すべてではないぞ、とい
う一種の「心のゆとり」があるのは確か
だ。少なくとも過去の経験から、私には
それが少なからず心の支えとなり、客観
的な見方、柔軟性が身についたものと確
信している。

かつて、私がそうだったが、目の前の
仕事に懸命で、そのような感慨を体験し
たことのない若い方々。何か壁にブチ当
つた時は、この先輩の老婆心思い出して
頂きたい。

それにしても、鴻文会総会の出席者が
四十名足らずのところ、「独文同窓会」に
は、約二十名の参加があったことは、ま
さに、岡光先生の快挙と言いたい。

先生からの要請で、「独文同窓会」の会
長職を田中宏芳君から引継ぐことになっ
たので、どうぞよろしくご支援のほどを。
四年後の再会を楽しみにしています。

Auf Wieder Sehen!

(伊藤 義彦 文理第二回卒)

昭和63年度事業報告

- 63. 5. 7 第9回役員会
- 5. 19 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会(添田幹事出席)
- 5. 28 人文学部10周年記念講演会
- 11. 30 人文学部10周年記念植樹
- 12. 20 「鴻文会会報第8号」発行

昭和63年度収支決算書

収入の部

科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
繰越金	7,148,382 円	7,148,382 円	0 円	前年度より繰越金
会費収入	1,200,000	1,260,000	60,000	5,000円×252
雑収入	200,000	150,694	△ 49,306	証券、預金利子
合計	8,548,382	8,559,076	10,694	

支出の部

科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
会議費	40,000 円	22,000 円	17,800 円	役員会車代他
記念事業費	600,000	557,500	42,500	10周年記念事業(記念講演会他 207,500円+記念植樹350,000円)
印刷費	150,000	155,000	△ 5,000	会報印刷作成費(3,000部)
郵送費	280,000	297,130	△ 17,130	役員会案内葉書 800円 10周年記念案内 144,000円 会報郵送料 150,000円 通信連絡費 2,330円
寄付金費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
謝金費	110,000	107,000	3,000	10周年記念案内アルバイト45,000円、会報送宛 名書きアルバイト37,000円、幹事用謝金25,000円
雑費	20,000	14,275	5,725	用紙代、フィルム代、DPE代他
予備費	7,248,382	0	7,248,382	
次年度へ繰越金		7,305,971		
合計	8,548,382	8,559,076		

平成元年6月10日 監査の結果過誤なく適確に経理されていることを確認します。

監事 森田良吉 印
行村和男 印

松岡利夫名誉教授が受勲!!

平成元年秋の叙勲が、「文化の日」の十一月三日に発表され、山口大学関係では四名の受勲者があった。文理・人文学部関係では元国史学講座教授の松岡利夫名誉教授(大正三年一月十八生)が勲三等旭日中綬章を受章された。ここにその栄誉をお祝いして、「山口大学学報」から氏の業績を転載する。

松岡名誉教授は、公立学校の教職を経て、昭和二十六年三月本学に勤務され、昭和五十二年四月停年により退職されました。退職後は、山口女子大学の教授に、昭和五十四年四月からは、岩国短期大学学長となられた。

この間、同人は、近世社会経済史及び民族学における教育・研究に務められ、多大の業績を挙げられるとともに、人材の育成及び本学の発展に寄与された。また、岩国短期大学学長として十年間にわたり、私学の管理・運営及びその振興に尽力され、大学・地域の発展に大きく貢献された。

同人は、民俗伝承の調査研究にあたると同時に、山口県地方の民俗文化財の調査・保存のため、防府市文化財審議会委員、同副会長等各種委員を歴任されるなど、地域社会の文化の発展に多大の功績を挙げられた。こうした業績により、山口県教育功労者表彰、山口県選奨等数々の賞を受賞されている。

山口大学創立四十周年記念
巡回講演会開催!!

本学は、昭和二十四年に学制改革による大学として発足以来、本年(平成元年)

平成元年度事業計画

1. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会（5月26日）
2. 第10回役員会（6月10日）
3. 鴻文会名簿作成（10月）
4. 第3回鴻文会総会（11月11日）
5. 「鴻文会会報第9号」発行（12月）
6. その他

平成元年度予算

収入の部

科目	元年度予算額	63年度予算額	比較増減	摘要
繰越金	7,305,971 円	7,148,382 円	157,589 円	
会費収入	1,500,000	1,200,000	300,000	5,000円×300
雑収入	200,000	200,000	0	証券、預金利子ほか
合計	9,005,971	8,548,382	457,589	

支出の部

科目	元年度予算額	63年度予算額	比較増減	摘要
会議費	80,000 円	40,000 円	40,000 円	役員会40,000円(車代等含む)×2
総会費	120,000	0	120,000	講演、当日アルバイト
記念事業費	0	600,000	△ 600,000	
印刷費	1,000,000	150,000	850,000	会報印刷作成費 (3,200部) 200,000円+名簿印刷作成費 800,000円
郵送費	1,538,000	280,000	1,258,000	役員会用葉書 2,000円 名簿作成用住所等確認 (82円×2,800) 総会、懇親会案内 103円×2,800 名簿、会報郵送料 (360円×2,800) 通信連絡費 10,000円
寄付金	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
謝金	150,000	110,000	40,000	名簿作成用宛名書きアルバイト 40,000円 総会懇親会用宛名書きアルバイト 40,000円 名簿会報用宛名書きアルバイト 40,000円 幹事用等謝金 20,000円 その他 10,000円
雑費	20,000	20,000	0	文具類、写真他
予備費	5,997,971	7,248,382	△1,250,411	
合計	9,005,971	8,548,382		

第三版にあたる同窓会名簿が出来上り、総会で出席者には配布致しました。和田前会長を先頭に役員一同協力し合って作り上げたものです。是非同窓生間の交流の活性化のために充分の活用をお願いしたいものです。前版とは若干スタイルも変わりましたが、会員の皆様のご批判、ご注文があれば、改めていききたいと思えます。出来ましたばかりでも、役員一同すでに誤りに気付いているところもあります。是非、ご一報下さい。しかしなにより会員の空白をうめることが先決です。未確認の会員についてご存じであれば、必ずお知らせ下さるようお願い致します。それにも名簿配布が遅れましたことを心からお詫び致します。

が四十年目にあたり、これを機に、四十年の歩みを回顧するとともに、大学を広く県民に開かれたものとし、新しい時代へ向かっての充実発展を目指す記念行事として、巡回講演会を開催した。

この講演会は、十一月七日(火)の萩会場を皮切りに県内五会場において、本学教官九名により行われた。人文学部関係では十一月二十日(月)宇部市会場で、フランス語学フランス文学の末松壽教授が「フランス文学とパスカル」と題して、パスカルの「パンセ」を、それが制作出版された十七世紀後半の文学状況に置き直すならば、どういことがわかるか、という要旨で講演した(「山口大学学報」四二九号より抜粋転載)

「一九八九年版 会員名簿」 出来る!!

鴻文会会則

(総則)

第1条 本会は鴻文会と称し、事務所を山口大学人文学部内におく。

第2条 本会は会員相互の親睦をはかり、山口大学人文学部の発展に寄与することを目的とする。

第3条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 会報及び会員名簿の発行
2. 会員相互の連絡、親睦の増進
3. その他必要と認められる事項

(会員)

第4条 本会は次の会員をおく。

1. 正会員 山口大学文理学部文学科卒業生、人文学部卒業生、文学専攻科修了者及び大学人文科学研究科修了者
2. 準会員 山口大学人文学部学生、文学専攻科学生及び大学院人文科学研究科学生
3. 特別会員 山口大学文理学部文学科教官、人文学部教官及び旧教官

(会費)

第5条 本会の経費は、会費、寄附金、その他の収入をもってあてる。正会員は終身会費5,000円を納入する。準会員は入学時において上記の終身会費を納入する。

(役員)

第6条 本会は次の役員をおく。任期は4年とし、再任は妨げない。

1. 会長 1名
2. 副会長 2名
3. 委員 若干名
4. 監事 2名

第7条 役員は次の職務を行う。

1. 会長は本会を代表して会務を総括し、副会長は会長を補佐する。
2. 会長、副会長及び委員は委員長を組織し、会務を処理する。
3. 監事は会務及び会計の執行を監査する。

第8条 委員会は名誉会長に山口大学人文学部長、また会務運営のため幹事若干名を委嘱することができる。

(総会)

第9条 本会の総会は正会員をもって構成し、4年ごとに開催する。総会は次の事項を審議し、出席者の過半数をもって議決する。

1. 事業の報告
2. 会計の報告
3. 役員を選出
4. 会則の改正及びその他の重要事項

(支部)

第10条 会員は本会の事業を推進するため、必要に応じ支部を設けることができる。

附 則 この会則は昭和60年11月2日より施行する。(昭和56年10月31日制定)

【役員】(平成元年11月11日選出)

名誉会長 …… 八木 充(山口大学人文学部長)

会 長 …… 大塚 博久(中国哲学、第4回卒、山口大学教育学部)

副会長 …… 森田 良吉(国史学、第4回卒、山口高校)、有馬 正人(西洋史学、第4回卒、徳山海陸運送)

委 員

(哲学・倫理学)

谷本 育紀(第12回卒、宇部中央高校)

(中国哲学)

大野 光生(第4回卒、山口高校)

(日本思想史学)

中川 省司(人第8回卒、萩土木事務所)

(美術・美術史)

橋本 陽子(人第6回卒)

(国史学)

八木 充(第2回卒、山口大学人文学部)

(東洋史学)

三好 信男(第6回卒、山口高校)

(西洋史学)

米屋 広志(第8回卒、防府商業高校)

(考古学)

磯部 貴文(人第3回卒、山口市教育委員会)

(社会学・社会心理学・社会人類学)

宮藤 隆夫(第15回卒、山口県庁)

(国語学・国文学)

小田 稜亮(第2回卒、山口鴻城高校)、有近八重子(第2回卒)

(中国語学・中国文学)

藤満 通(第6回卒、山口高校)

(英語学・英米文学)

和田 敏英(第1回卒、山口大学人文学部)、齊藤 稀(第3回卒、宇部工業高専)

(ドイツ語学・ドイツ文学)

杉山 勇次(第7回卒、山口市役所)

(フランス語学・フランス文学)

福井 真典(人第6回卒、山口市役所)

(言語学)

山口 敦(人第6回卒、豊北高校)

監 事

竹内 通弘(英米文学、第2回卒、山口高校)、芳西 靖幸(社会学、第11回卒、防府養護学校)

幹 事

岡光 一浩(ドイツ文学、第14回卒、山口大学人文学部)

添田建治郎(国文学、第17回卒、山口大学人文学部)

佐々木 衛(社会学、第19回卒、山口大学人文学部)

昭和六十三年年度

人文学部卒業生・
大学院修了生進路状況

区分	人文学科			語学文科学科			合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
就職者	46	36	82	10	55	65	56	91	147
進学者	5		5	1		1	6		6
聴講生・研究生		1	1	1	1	2	1	2	3
その他	8	4	12	2	7	9	10	11	21
計	59	41	100	14	63	77	73	104	177

区分	地域文化			言語文化			合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
就職者	1	1	2				1	1	2
進学の									
その他	1		1	2		2	3		3
計	2	1	3	2		2	4	1	5

人文学科
哲学・倫理学
岡山県貨物運送(株)、(株)岡山木村屋、
(株)第一紙行
中国哲学
(株)シーイーシー、日本電気通信システ
ム(株)
日本思想史学
(株)エヌ・エス・イー(日本ハム・シス
テム・エンジニアリング)、山口放送、
(株)西日本銀行、山口県庁、(株)大林組九

西洋史学
長崎北陽台高校(臨)、(株)字部電子計
算センター、(株)ダイイチ、(株)鷗州社、
晶学社、(株)字部情報システム、山口日
産自動車(株)、ウツミ屋証券(株)
考古学
大和生命保険相互会社、(株)そごう、境
高等学校(公立)、佐賀県教育委員会
(嘱託)、(株)大阪有線放送社、新日鉄情
報通信システム(株)、東洋信託銀行(株)、
奈良国立文化財研究所(嘱託)

国文学
字部中央高等学校(公立)、字部養護学
校分校(公立)、字部工業高等学校(公
立)、(株)鷗州社、九州大学大学院文学研
究科、小野田高等学校(公立)、城山観
光(株)、毛利博物館(臨)、八幡証券(株)
中国語学・中国文学
日興証券(株)、岡山市立高島中学校、下
関中央工業高等学校(公立)、山口放

地域文化
津山市役所、研究生(人文学部)、日
本電気ソフトウェア(株)
送(株)、日本タイムシエア(株)、ジャスコ
(株)、岡藤商事(株)(福岡店)、(株)字部情
報システム、(株)サンデー山口、(株)ト
メン、(株)広島銀行
英語学
山口労働基準局(臨)、高森高等学校
(公立)、(株)九州銀行、(株)三城、日本電
気(株)、日本電気通信システム(株)、(株)C
SK、徳佐高等学校(公立)、字部西
高等学校(公立)、高森高等学校(公立)
英米文学
太華中学校(公立)、山口大学(経理
部)、アンビック外語学院山口校、西
鉄旅行(株)、京セラ(株)、(株)インラック、
徳山北高等学校(公立)
ドイツ語学・ドイツ文学
中山修身法律事務所、キャセイパシフ
リック航空会社九州支店
フランス語学・フランス文学
オートラマ新山口(株)、富江高等学校
(公立)、日榮不動産(株)、日本生命保険
相互会社、(株)広島総合銀行、山一証券
(株)(徳山支店)、富国生命保険相互会社、
(株)エドウィン、日本生命保険相互会社
(広島支店)、通津中学校(公立)
言語学
(株)ノエビア、田布施農業高等学校大島
分校(公立)、聴講生(人文学部)、
(株)第一学習社、日本生命保険相互会社
(徳山支店)、岡三証券(株)、(株)ノエビア
(株)日本ビジネスコンサルティング、(株)ト
ラペラー商会、(株)天満屋(広島店)
人文学部研究科

国史学
近畿日本ツーリスト(株)(尾道支店)、カ
ホ無線(株)、ルネサンステニススクール
熊本、(株)アートコーヒー、大日本印刷
(株)、(株)大伸社、神戸大学大学院文学研
究科、(株)西日本銀行、松尾建設(株)、
イズミ、(株)アイビー化粧品(九州事業
部)、大利中学校(公立)
東洋史学
キリンビール(株)、徳山工業高等学校
(公立)、(株)仁科百貨店、東陶機器(株)、
盈進高等学校(私立)、東洋電器(株)、
北九州市立若松中学校(臨)、新日本
証券(株)広島支店、(株)九州リースサービ
ス、玉島北農業協同組合

社会学・社会心理学
クオレ九州販売(株)、(株)クラシック、(株)
安川電機製作所、山口大学大学院人文
科学研究科、下松市役所、トヨソーサッ
シ(株)、聴講生(東京都立大学)、山口
市役所、(株)広島そごう、クリエイティ
ブ・ヨーコ(株)、宮崎ダイハツ販売(株)、
日本電信電話(株)(中国総支社)、(株)日
本エアシステム、(株)日本SPセンター、
セコム(株)、山口大学人文学部社会学研
究室(事務)、関西バイント(株)、(株)ジェ
エムエーシステムズ、(株)天満屋、サッ
ポロビール(株)
社会人類学
大日本印刷(株)、(株)エヌ・ケーエクス、
尚和化工(株)、(株)ワールド、(株)菱化シス
テム、エース交易(株)、(株)丸久、トヨー
サッシ(株)、山口大学大学院人文学部研
究科、日本電池(株)、シャープ(株)
語学文科学科
国語学
(株)鷗州社、(株)宮崎情報処理センター、
(株)リクルート、(株)ダイエー(中四国事
業本部)、(株)山陰合同銀行、朝倉東高
等学校(臨)、日電東芝情報システム
(株)、広瀬高等学校(公立)、(株)西友、
佐世保工業高等学校(公立)

英米文学
太華中学校(公立)、山口大学(経理
部)、アンビック外語学院山口校、西
鉄旅行(株)、京セラ(株)、(株)インラック、
徳山北高等学校(公立)
ドイツ語学・ドイツ文学
中山修身法律事務所、キャセイパシフ
リック航空会社九州支店
フランス語学・フランス文学
オートラマ新山口(株)、富江高等学校
(公立)、日榮不動産(株)、日本生命保険
相互会社、(株)広島総合銀行、山一証券
(株)(徳山支店)、富国生命保険相互会社、
(株)エドウィン、日本生命保険相互会社
(広島支店)、通津中学校(公立)
言語学
(株)ノエビア、田布施農業高等学校大島
分校(公立)、聴講生(人文学部)、
(株)第一学習社、日本生命保険相互会社
(徳山支店)、岡三証券(株)、(株)ノエビア
(株)日本ビジネスコンサルティング、(株)ト
ラペラー商会、(株)天満屋(広島店)
人文学部研究科

州支店、山口大学大学院人文学部研究
科、福岡県警察本部、佛教大学大学院
文学研究科、(株)ゼンリン、(株)シーア
ン
ドシー
文学・美術史
(株)タイトー、(株)富士通九州システムエ
ンジニアリング、日本コンピュータ・
ダイナミクス(株)、(株)教育文化社、(株)G
Sタカハシ、住商コンピュータサー
ビス(株)、高宮高校(臨)

社会学・社会心理学
クオレ九州販売(株)、(株)クラシック、(株)
安川電機製作所、山口大学大学院人文
科学研究科、下松市役所、トヨソーサッ
シ(株)、聴講生(東京都立大学)、山口
市役所、(株)広島そごう、クリエイティ
ブ・ヨーコ(株)、宮崎ダイハツ販売(株)、
日本電信電話(株)(中国総支社)、(株)日
本エアシステム、(株)日本SPセンター、
セコム(株)、山口大学人文学部社会学研
究室(事務)、関西バイント(株)、(株)ジェ
エムエーシステムズ、(株)天満屋、サッ
ポロビール(株)
社会人類学
大日本印刷(株)、(株)エヌ・ケーエクス、
尚和化工(株)、(株)ワールド、(株)菱化シス
テム、エース交易(株)、(株)丸久、トヨー
サッシ(株)、山口大学大学院人文学部研
究科、日本電池(株)、シャープ(株)
語学文科学科
国語学
(株)鷗州社、(株)宮崎情報処理センター、
(株)リクルート、(株)ダイエー(中四国事
業本部)、(株)山陰合同銀行、朝倉東高
等学校(臨)、日電東芝情報システム
(株)、広瀬高等学校(公立)、(株)西友、
佐世保工業高等学校(公立)

英米文学
太華中学校(公立)、山口大学(経理
部)、アンビック外語学院山口校、西
鉄旅行(株)、京セラ(株)、(株)インラック、
徳山北高等学校(公立)
ドイツ語学・ドイツ文学
中山修身法律事務所、キャセイパシフ
リック航空会社九州支店
フランス語学・フランス文学
オートラマ新山口(株)、富江高等学校
(公立)、日榮不動産(株)、日本生命保険
相互会社、(株)広島総合銀行、山一証券
(株)(徳山支店)、富国生命保険相互会社、
(株)エドウィン、日本生命保険相互会社
(広島支店)、通津中学校(公立)
言語学
(株)ノエビア、田布施農業高等学校大島
分校(公立)、聴講生(人文学部)、
(株)第一学習社、日本生命保険相互会社
(徳山支店)、岡三証券(株)、(株)ノエビア
(株)日本ビジネスコンサルティング、(株)ト
ラペラー商会、(株)天満屋(広島店)
人文学部研究科

平成元年度
人文学部在籍学生数

(平成元年十月一日現在)

総数 八二一	人文学科				合計	国語学				合計	国語学				合計		
	哲学・倫理学	中国哲学	日本思想史学	美学・美術史学		国史学	東洋史学	西洋史学	考古学		社会心理学	社会人類学	国文学	中国語学・中国哲学		英語学	英米文学
100	5	6	9	14	138	17	10	10	14	11	10	15	10	10	6	10	100
69	(1)	(2)	(3)	(7)	63	(3)	(9)	(4)	(11)	(7)	(9)	(11)	(9)	(9)	(5)	(6)	63
84	6	2	2	10	111	16	11	11	14	11	11	14	10	10	6	10	111
64	(1)	(1)	(1)	(4)	69	(2)	(1)	(1)	(4)	(7)	(6)	(4)	(6)	(6)	(4)	(6)	69
89	4	2	3	9	114	10	12	12	13	12	10	13	11	10	9	10	114
64	(1)	(1)	(1)	(4)	69	(6)	(8)	(8)	(10)	(4)	(6)	(10)	(9)	(10)	(7)	(10)	69
85	4	3	5	12	100	10	12	12	13	10	10	13	11	10	9	10	100
69	(1)	(1)	(1)	(4)	62	(6)	(8)	(8)	(10)	(4)	(6)	(10)	(9)	(10)	(7)	(10)	62
358	15	11	30	36	463	43	35	35	42	32	35	42	31	31	23	31	463
(27)	(4)	(4)	(12)	(29)	(22)	(31)	(26)	(20)	(32)	(23)	(30)	(32)	(29)	(29)	(17)	(21)	(22)

※()は女子で内数

『鴻文会会報』は、

読まれていますでしょうか!!

今回「会報」第九号をお送り致します。読まれて如何でしょうか。少し文学っぽいとか、もっと大学のニュースがほしいとか、もっと同窓生のものであってほしいとか、意見をお持ちではありませんか。皆様の貴重な会費で会報は作られているものです。そして郵送費もバカになりません。皆様のご感想を聞きたいものです。作る以上、そしてお送りする以上、同窓会誌として皆様のなかに融けこむ、意味のあるものになりたいと思います。もう九号をむかえますが、編集子の能力不足からまだご覧のように試行錯誤の状態です。バラバラでまとまりのあるものが作れません。次号は第十号となります。この機会に会員の皆様の「会報」に対するご希望ご意見を聞き、それを大幅に誌面に生かしていきたいと思えます。なにしろずっと学内にいますと、遠く山口を離れている同窓生の皆様が「会報」に何を望まれ、何を読みたいのか、なかなか分かりにくいところがあります。学内にいる者の立場から会報を作るといふより会員全体の立場にたつた会報、それが会報としてあるべき姿だと考えます。如何ですか。次号十号の会報誌上には「会報はこうあってほしい」のご意見を掲載したいと思えますが、ふるってご意見をお寄せ下さいませんか。

※「会報」への原稿を募集しています。

* 編集後記 *

- 「会報」第九号、遅くなりましたして申し訳ありません。例年なら年内十二月に皆様のところにお届けしていますのに、今号は大幅に遅れました。名簿作成に少々エネルギーを使いすぎ、なかなか「会報」にとりかかれませんでした。お詫び致します。
- すでに書きましたが、名簿の方も、郵送費節約で会報と一緒に送るといふことになり、遅れてしまいました。重ねてお詫び致します。
- 従いまして、会報の原稿をいただきました方には、昨年書いていただきましたものもあり、文中で年の計算がズレているところがあるかもしれません。そのことをお考えのうえ、皆様お読み下さるようお願い致します。
- 今号は、第三回総会特集号ということ、恒例の「私の中の山大・山口」いま山大・山口は「山口点描」はお休みになりました。次号よりまた続けたいと思えますのでご協力をお願い致します。
- 三面で第三回総会の報告を致しましたが、ご覧のように、益々参加者は少なくなりました。なにかよい名案はないものでしょうか。お教え下さい。
- しかし、重中さんの貴重なお話を拝聴できましたし、恩師の先生もお越しに劣らず盛り上がりましたし、少ないながらもまずは成功の総会ではなかつたかと一人安堵しております。
- 和田先生が二期八年の会長を辞された

した。私たち幹事も和田先生に従っていけばということで幹事を続けてまいり、先生にはいろんなことをお教えたいたただいたように思います。大学での激職にあられながらの鴻文会創設期からのご苦労、大変だったことが近くにいたものとして実によくわかります。昭和五十六年に生まれた鴻文会もやっとな軌道に乗った感じがします。これも先生のご努力の賜物です。鴻文会の、「大鳥のごとく将来雄飛する」基礎を作られた、和田先生に重ねて心から感謝を申し上げたいと思います。幸い先生は委員として留まっていたいておりますので、そのご経験をこれからも学んでいきたいと思っております。

●今回から役員メンバーが少しふえました。各講座の代表ということでお願い致しました。役員の方どうぞよろしくお願ひします。いろんなご希望、ご意見、役員の方を通してでも結構です。どしどしお寄せ下さい。

●大塚博久新会長、以下役員一同、同窓会のために少しでも役立てばと思っておりますので今年もよろしくお願ひ致します。

会費未納の方のみ振替用紙を同封致しております、なにとぞお納め下さいますようお願いいたします。

終身会費 五、〇〇〇円
郵便振替口座 下関〇一五九〇二二
加人名 鴻文会